実践報告

初級日本語クラスにおける日本人学生との「話す活動」について

深川　美帆・鶴町　佳子・川上　ゆか・岡本さや子[注1]

要　旨

本稿は，日本語のクラスに日本人学生が参加し，会話練習や話し合いをする活動(以下，話す活動）の初級クラスでの実践報告である。金沢大学留学生センター総合日本語プログラムの初級クラスでは，日本語学習者である留学生の日本語の会話能力と学習動機の向上を目的に，週１回30分間，学期を通して話す活動を行った。教師による授業観察，参加した日本人学生からのコメント，留学生に学期末に実施したアンケート結果から，この活動が留学生の日本語の運用力を高める練習として効果があること，また日本人学生にとっても異文化への関心やコミュニケーション力向上に役立っていることがわかった。

【キーワード】会話能力，コミュニケーション能力，日本人学生，異文化理解

Ⅰ．はじめに

金沢大学国際機構留学生センター総合日本語プログラムでは，本学で学ぶすべての留学生を対象に日本語教育を行っている。本稿では，このプログラムで開講している日本語クラスのうち，初級クラスの授業で行っている日本人学生と留学生との日本語を使っての言語活動（以下，話す活動と記す）の実践について報告する。

現在，本学には40カ国１地域からの留学生522人が在籍しており，このうち256人の留学生が総合日本語プログラムで学んでいる[注2]。総合日本語プログラムのクラスは，日本語力によってＡレベル（初級）からＦレベル（上級）までの７レベルに分かれており，それぞれのレベルで四技能を総合的に学ぶ総合クラス（週３～４回），漢字クラス（週１回），技能別クラス（週１回）などにより構成されている。学習者は正規学生(学部生，大学院生）をはじめ，本学の各種留学プログラムに参加し，半年から１年間

本学に在籍する特別聴講学生，大学院への進学を目指す研究生などである。彼らは大学での学習や研究で必要な日本語力および大学での日常生活に必要な日本語力を身につけることを目的としており，学習動機は比較的高く，日々の学習にも熱心に取り組んでいる。しかしながら，留学生からは「せっかく勉強しても，日本語で日本人と話す機会が少ない」「日本語を使うのは日本語のクラスだけ。研究室に戻ったら話す機会はない」という声が少なくなかった。日本の大学で勉強していても，キャンパスに日本人学生がたくさんいても，日本語でコミュニケーションする機会が意外に少なく，それ以前に日本人学生との接点が日常的に少ないことが明らかになってきた。そこで，総合日本語プログラムでは，学習者である留学生に日本人と話すためのきっかけを作るため，また，クラスで学んだ日本語を実際に使う機会を増やすために，日本語の授業に日本人学生に来てもらい，話す活動を組み込むことにした。この活動は，2011年度秋学期[注3]から始め，現在も継続している。本稿では，これまでの話す活動の実施内容を振り返り，学習者や教育への効果を考察するとともに，今後の学習活動の展望について報告する。なお，この話す活動は，総合日本語プログラムの総合クラスの初級から上級までのクラスでさまざまな形式で取り入れているが，本稿では，毎週の授業にこの活動を取り入れている三つの初級クラス（クラス名「日本語Ａ１」「日本語Ａ２」「日本語B」）の2013年秋学期と2014年春学期での活動を取り上げる。

II. 初級日本語クラスにおける日本人学生との話す活動の概要

1　金沢大学総合日本語プログラム初級クラスについて

総合日本語プログラムの初級クラスは，週４コマ（１コマ90分）開講されており，一学期は15週からなる。主教材は『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を用いており，このシラバスに基づき，語彙，文型の導入・練習の他，会話練習を行っている。これらに加え，聴解練習，書く練習（作文やメール）なども行い，四技能を総合的に身に付ける内容となっている。各クラスのレベル，総学習時間，主教材は表１のとおりである。話す活動は，こうした学習活動の一部として組み込まれており，特にこの活動では，学んだ語彙や表現を用いて実際に日本人とのインタラクションを行うことで，日本語の運用力と日本語学習への動機付けを高めることを目的としている。

授業は，３～４名の講師によるチームティーチングによって行われており，曜日ごとに担当講師が固定している。話す活動についてはそれぞれのクラスの担当者の１名が学期を通して担当した。学習者は，前述したように本学に在籍する留学生で，所属や

表1　総合日本語プログラム　初級クラス概要（2013年秋学期，2014年春学期）

クラス	A 1	A 2	B
レベル	初級前半（ゼロ初級）	初級前半（既習）	初級後半
コマ数／週 総学習時間数	4 コマ 90時間	4 コマ90時間（2013秋） 3 コマ75時間（2014春）注3	4 コマ 90時間
主教材	『みんなの日本語初級』 第 1 課～第25課	『みんなの日本語初級』 第 8 課～第32課	『みんなの日本語初級』 第26課～第50課

身分，母語はさまざまである。クラスによって学習者数が異なるが，1 クラス 5 名～20 名である。

2　話す活動に参加する日本人学生について

この活動に参加する日本人学生は，本学に在籍する日本語を母語とする学生である。学期開始時に全学の日本人学生に対してこの活動への参加募集の案内を全学のポータルサイトである「アカンサス・ポータル」および留学生センターのホームページ上で案内し，さらに参加希望者に説明会を実施して活動の趣旨を説明し，参加者を募っている。参加資格は本学の学生であること以外に特に問わない。参加を希望する学生は学部 1 年生から大学院生まで，また所属する学部や研究科は多様である（表 2）。この活動への参加はまったくのボランティアであり，活動に参加したことで特に単位付与や何らの評価，報酬などはない。参加を希望する学生は総合日本語プログラムのコーディネーターまでメールで申し込みをし，ML に登録される。ML から配信される各クラスの活動の案内を見て，希望する活動日に日本語のクラスに行き，活動に参加する。

表2　日本語クラスの話す活動への参加申込者数

学期	2011秋	2012春	2012秋	2013春	2013秋	2014春
人数	46	31	36	80	47	26

初級クラスの話す活動は，学期開始 3 週目から週 1 回のペースで行っており，参加する日本人学生には基本的に学期を通して継続して参加するように協力を求めている。したがって，毎週だいたい同じ参加者が授業の活動に参加することになっている。

以上，話す活動についての概要について述べた。次に，各クラスにおける具体的な活動内容について述べる。

Ⅲ．日本人学生との話す活動の実際

以下に，各クラスで具体的にどのような目的で，どのような学習活動が行われていたかを述べる。なお，クラスの話す活動は，Ａ１クラスを川上が，Ａ２クラスを岡本が，Ｂクラスを鶴町が二学期とも担当した。

１．日本語Ａ１クラス

Ａ１クラスは授業の到達目標を，日本語で短い質問や会話を聞いて理解し，短い話を読んで理解し，基礎的な文法や語彙を使って正しい文が書け，簡単な日常生活のコミュニケーションができるようになることとし，Ⅱの１にあるような内容で授業を進めている。Ａ１クラスに在籍する学習者は，正規の大学院生や研究者が大半で，研究活動は英語で行っており，日本語使用の必要性も機会も少ない環境にいるが，日常生活における日本語習得の必要性を感じ，受講する学生が多い。

Ａ１クラスでの話す活動の大きな目的は学習した項目を使用した簡単な日本語会話を楽しみ，学習の動機付けにすることである。また，活動に参加してくれる日本人学生にとっては，活動開始時点では簡単な日本語も通じない留学生との意思疎通の難しさを体験し，それをどう克服し，相互理解へつなげていくかを体験することも目的と

表３　話す活動の内容および参加学生数（2013年秋学期Ａ１クラス）

回	授業日	活動内容	日本人数	学習者数
1	10月23日	自己紹介	8	6
2	10月30日	練習Ｃ（L6），インタビュー活動	9	5
3	11月13日	練習Ｃ（L9），買い物のロールプレイ	4	3
4	11月20日	練習Ｃ（L11），家族・友達等について話す（写真等持参）	2	5
5	11月27日	練習Ｃ（L12），テスト準備（誘う会話練習）	4	5
6	12月11日	練習Ｃ（L15），クリスマスカードを書く（互いの言語で）	4	5
7	12月18日	練習Ｃ（L17），クリスマスカードを郵便局から送る	2	5
8	１月８日	練習Ｃ（L19），福笑い	1	2
9	１月15日	練習Ｃ（L20），動詞すごろく①	2	3
10	１月22日	練習Ｃ（L22），動詞すごろく②	1	2
11	１月29日	言葉を教えましょう：挨拶・自己紹介	2	2
12	２月５日	「私の国」発表（A2クラスと合同で）	5	3

している。

活動内容は，表３・４のように実施した。教科書にある会話練習である練習Ｃの談話内容とそれに続く活動に関連のないものもあるが，練習Ｃの発話練習を留学生同士で行うより日本人学生と行うことで発音訂正等の効果があるのではないかと考え行った。日本人学生に対しては，毎週活動の２，３日前にメールでその週の活動について簡潔に説明した内容を知らせた。クラス内活動では初級ということもあるため，英語の使用は制限せず，また日本語での会話練習の相手をするという以外は特別な指示や注意は与えず，各学生の裁量に任せていた。

2013年秋学期は，授業担当者がこの活動を行うのが初めてであったため，どのような活動が留学生と日本人学生にとって効果的かを試行錯誤する学期となった。そのため，学期始めに具体的かつ長期的な計画を立てず，毎回の授業での様子を見ながら，

表４　話す活動の内容および参加学生数（2014年春学期Ａ１クラス）

回	授業日	活動内容	日本人数	学習者数
1	５月２日	自己紹介	8	19
2	５月13日	L8練習 C1，スリーヒントクイズ：形容詞文を使って	6	20
3	５月20日	L10練習 C1，「誘う」会話	5	19
4	５月27日	L12練習 C1，「旅行が好きですか」：どこに旅行に行って，何をして，どうだったかを話す	6	19
5	６月３日	「自分の町」：自分の国，町についてプレゼンテーションをし，日本人学生にどの国へ行きたいかを決めてもらう	4	18
6	６月10日	言葉を教えましょう：挨拶・自己紹介	7	14
7	６月17日	L16練習 C2，ルームメイト探し：「V てもいいですか /V てはいけません /V ないでください」を使用して	5	16
8	６月24日	アルバイト探し（面接）：「V ことができる」を使用して	2	17
9	７月１日	「うそはどれ？」：「～ことがあります」を使って，文を作成し，クイズ形式で嘘を見つける	4	16
10	７月８日	連体修飾節（例　眼鏡をかけている人）を使ったフルーツバスケット	3	11
11	７月15日	動詞すごろく：動詞文を作成する活動	2	9
12	７月22日	病院での会話：病状を伝える	0	8
13	７月29日	金沢観光一日プラン：旅行パンフレットなどを使って	1	9

活動を組み込んでいった。また，クリスマスカードや福笑い，すごろく等季節に合わせた活動もいくつか取り入れてみた。2014年春学期は，前学期での実践をもとに，なるべく学習項目に関連した活動を取り入れ，かつ，ゲームを増やすことで，グループ内でもクラス全体でも楽しめる活動を多く取り入れるように試みた。

2．日本語Ａ2クラス

Ａ２クラスでは，既有の日本語の知識を使って，自分の思いを表現し，また相手の表現意図もわかるようになること，特に，同世代の日本人学生とお互いに意見を交換し，理解し合えるようになることを活動の目的とした。Ａ２クラスの学生は両学期とも皆大学院生および特別聴講学生で，専門の研究や発表などは英語で行っているが，日常生活では日本語が必要となるため受講している。Ａ１クラスとは異なり，来日前に短期間の日本語学習歴があり，仮名の読み書き，初級前半の知識が多少ある学生が多いが，日常生活に支障をきたさないレベルには達していない。そこで，Ａ２クラスでは，初級の基礎的な学習を進めながら，実際に日本語を話す機会を設け日本語力を

表５　話す活動の内容および参加学生数（2013年秋学期Ａ2クラス）

回	授業日	活動内容	日本人数	学習者数
1	10月23日	自己紹介・フリートーク	4	4
2	10月30日	インタビュー活動	8	2
3	11月13日	金沢･金沢大学について情報交換（パンフレット使用）	4	4
4	11月20日	家族・友達について（学生が写真を用意）	2	4
5	11月27日	中間試験（話すテスト）の練習（ロールプレイ，QA）	3	4
6	12月11日	トピックについて話す①（トピックカードを使用）	4	4
7	12月18日	各国のクリスマス，お正月について（教師が写真を用意）	3	3
8	1月8日	冬休みの思い出	3	3
9	1月15日	トピックについて話す②（トピックカードを使用）	2	4
10	1月22日	ミニ外国語レッスン1（留学生が母語を留学生に教える）	0	4
11	1月29日	ミニ外国語レッスン2（留学生が母語を日本人に教える）	3	4
12	2月5日	「私の国」発表（A1・A2合同）記念撮影	3	4

高めることをねらいとした。実際の活動内容は以下の表５・６のように実施した。活動は，毎週１回，90分授業の後半30分を話す活動の時間として設けた。前半60分の授業内容とは関連付けず，教科書の学習文型や語彙を超えた自由度の高い活動内容とした。活動に際して，教師からの制限（使用文型や語彙の指示）はしなかったが，学生からの質問等で説明が求められる場合や，教師が必要と判断した場合は適宜介入し補足した。教科書中心の学習では受動的な活動が多くなるため，ここでの話す活動では能動的な活動を意識的に多く取り入れるようにした。活動では，発話機会を多く設けるために，１対１のペア活動を中心とし，活動内容によってはグループや全体で行った。活動にあたって，事前準備が必要な場合（写真や資料の持参等）は，教師から学生に適宜指示を与えた。特に日本人学生にはメールでの連絡を密に取り合い，継続的な参加を呼びかけるようにした。教師のスタンスとしては，活動のテーマ選択や運営

表６　話す活動の内容および参加学生数（2014年春学期Ａ２クラス）

回	授業日	活動内容	日本人数	学習者数
1	４月23日	自己紹介・フリートーク	5	4
2	４月30日	GW の予定 金沢・金沢大学について情報交換（パンフレット使用）	4	4
3	５月７日	GW について（青空教室）	2	4
4	５月14日	トピックについて話す①（トピックカード使用）	3	3
5	５月21日	日本語でランチ（学生食堂へ行って一緒に食べる）	3	2
6	５月28日	中間試験（話すテスト）の練習（ロールプレイ，QA）	3	3
7	６月４日	日本語すごろく①（ます形や普通形の文作成）	1	3
8	６月11日	ミニ外国語レッスン①（留学生が母語を日本人に教える）	3	2
9	６月18日	日本語の歌（「アナと雪の女王」の主題歌）	3	3
10	６月25日	トピックについて話す②（トピックカード使用）	3	2
11	７月２日	ミニ外国語レッスン②（留学生が母語を日本人に教える）	3	2
12	７月９日	日本語すごろく②（文作成→質疑応答）	2	1
13	７月16日	中間試験（話すテスト）の練習（ロールプレイ，QA） 学期の振り返り	3	1

は行うものの，基本的には学生同士の協力，自主性を重視した活動になるように後方支援に努めた。

3．日本語Bクラス

初級の仕上げのレベルであるBクラスでは，日本語の運用力と日本語学習の動機付けを高めるという初級クラス共通の目的のほか，日常的に出会う場面で自分なりに文を作り出し，依頼や許可求めなどのタスクを達成できるようになることを活動の目的とした。Bクラスの学生たちは語彙や文型等多くの表現形式を学んできているが，場面に応じた適切な表現をすぐに頭の引き出しから出すのは容易ではない。また，間違いを恐れてなかなか発話できない学習者も多いため，この活動を通し，少々不正確であってもタスクを達成できることを実感し，臆さず発話できるようになることを目指した。このほか，与えられたトピックについて話をする，いわゆる「おしゃべり」に慣れることも目的とした。

以上の目的のために，Bクラスの話す活動では次の二つ，ロールプレイ（以下，RP）とトピックを指定した自由会話（以下，トピック会話）を毎回行うこととし，表7・

表7　話す活動の内容および参加学生数（2013年秋学期Bクラス）

回	授業日	活動内容	日本人数	学習者数
1	10月23日	金沢の地図を使って話す	9	15
2	10月30日	トピックカードを使って話す①	13	14
3	11月20日	RP「冬休みについてのアドバイス」，トピック会話「私の国のおすすめの場所」	9	13
4	12月4日	トピックカードを使って話す②	7	15
5	12月11日	RP「先生に遅刻を謝る」，トピック会話「年中行事」	7	14
6	12月18日	RP「先輩に日本語のチェックを頼む」，トピック会話「日本に来てびっくりした／うれしかった／困ったこと」	3	14
7	1月8日	RP「友だちに伝言を頼む」，トピック会話「留学の目的」	6	11
8	1月15日	RP「電気店で値切り交渉をする」，トピック会話「私の国の学生と日本の学生」	5	10
9	1月22日	RP「電気店で修理を頼む」，トピック会話「日本に来たばかりのときと今」	5	9
10	1月29日	RP「先輩に電子辞書を借りる」，トピック会話「私の国のニュース」	5	13

8のように実施した[注5]。

活動では，概ね学習者2名に対し日本人学生1名というグループ構成で活動を行った。日本人学生は日本語教育に関する知識がない者がほとんどであるため，毎回活動前にプリントを渡し，押さえてほしい表現やモデル会話などを示すようにした。留学生には，活動前にRPの状況確認とトピック会話のトピック提示を行い，使う表現のヒントを与えた。教師は，活動の指示を全体に対し行ったあとはグループを巡回し，学習者には日本語について，日本人学生には留学生へのフィードバックの与え方などについて適宜アドバイスを行った。おしゃべりにも少しずつ参加し，活動状況を把握するとともに，留学生と日本人学生との距離が縮まるようにサポートした。

表8　話す活動の内容および参加学生数（2014年春学期Bクラス）

回	授業日	活動内容	日本人数	学習者数
1	4月28日	GWの予定，おすすめの場所などについて話す	5	5
2	5月8日	GWにしたこと，金沢市内でよく行く場所とその理由について話す	3	5
3	5月12日	トピックカードを使って話す①	4	5
4	5月19日	RP「忘れ物の問い合わせ」「アパートの管理人に質問」	4	4
5	5月26日	RP「夏休みについてのアドバイス」，トピック会話「私の国のおすすめの場所」	3	5
6	6月9日	トピックカードを使って話す②	4	5
7	6月16日	RP「先生に遅刻を謝る」，トピック会話「子供のときの話」	3	4
8	6月23日	RP「先輩に日本語のチェックを頼む」，トピック会話「日本に来てびっくりした／うれしかった／困ったこと」	3	5
9	6月30日	RP「友だちに伝言を頼む」，トピック会話「留学の目的」	3	3
10	7月7日	RP「電気店で修理を頼む」，トピック会話「日本に来たばかりのときと今」	4	5
11	7月14日	RP「先輩に電子辞書を借りる」，トピック会話「私の国のニュース」	3	4

Ⅳ．活動についての考察

各クラスの活動について，担当教師による授業観察記録，参加した学生からのコメントシートの記述，学期末に実施したアンケート（およびインタビュー）結果，授業

における振り返りの資料をもとに考察する。

1．日本語Ａ1クラス

2013年秋学期に関しては，試行錯誤ではあったが，簡単な日本語でコミュニケーションを楽しく行うという活動目的は果たせていたと思われる。活動中意思疎通できないことも多々あったが，留学生も日本人学生も積極的に日本語で会話をしようと試み，協働して活動を行っていた。学期末のアンケート調査結果を見ると，アンケートに回答した2名共活動に積極的に参加し，日本語の習得にも役に立ったと答えていた。また日本人学生の活動後のコメントを見ると，初期の段階ではどう接したらいいかわからないといった戸惑いのコメントもあったが，回を重ねるうちに留学生との交流でうまくできたことや留学生の日本語の上達に関する内容が増えていった。

2014年春学期に関しては，先学期アンケートで学生からの評価が高かった，すごろくや福笑いなど，ゲーム感覚で学習項目を復習できる活動をなるべく多く取り入れるようにした。学期末の留学生へのアンケートを見ると，アンケートに回答した9名中8名が活動に積極的に参加し，7名が日本語の習得にも役立ったという回答があった。先学期に比べクラスの人数が多かったこともあり，学習者の人数に対して日本人学生の数が少なく，教師も一人一人の活動を詳細には観察できなかったが，皆，目標である簡単な日本語でのコミュニケーションを楽しんでいた。時には英語で意思疎通をする場面も見られたが，それが活動自体を妨げることはなかった。

どちらの学期も，留学生側は日本人学生の内気さに，逆に日本人学生側は留学生の積極性に対するコメントが多く見られた。留学生には毎回授業後，can-do シートにその日の活動でできたことやできなかったことについてコメントを書いてもらった。コメントを見ると，自分の語彙の少なさや非流暢性について，また，日本人の話す日本語がわからず困ったというコメントが多く見られた。日本人学生に書いてもらったコメントには，初期の段階では，留学生がわからない言葉や表現をどう教えたらいいか，また留学生の発音の困難点に関するコメントが多かったが，学期末には，留学生の日本語の上達に関するコメントが多く見られた。最初は戸惑っていた日本人学生も，回を重ねるうちに留学生とも打ち解け，活動内容以外の会話をしたり，授業後もしばらく教室に残って話したり，連絡先を交換したりし，授業外での交流を行う者もいた。

両学期の活動の様子を観察してみると，ボランティアということ，1限目の授業であることで，回を追うごとに徐々に参加人数も減り，学期末には毎回決まった少数の日本人学生のみ参加という状況であった。途中から来なくなった日本人学生は早い段階で活動に参加しなくなるため，長期的な観察はできていないが，留学生の言いたいこ

とを根気よく聞き，また，努力してわかりやすく話し，活動に能動的に取り組める学生は留学生と友好的な関係を築き，より多くの交流ができているようであった。

留学生には日本語で話す機会を，日本人学生には留学生との気楽な交流の機会を与えることを目的とした活動であるが，Ａ１クラスに関しては，実はそれほど気楽な交流ではない。普段話している日本語では通じないことに気づき，イライラしたり，困ったりすることで各自解決策を見出し，いかに留学生と分かり合えるようになるかの試行錯誤をも目的としている。この目的に関する直接的な言及はなかったが，活動後半には「以前よりいろいろ話せるようになった」という日本人学生のコメントが多くなり，留学生側も同様の反応である。これは留学生の日本語能力の向上もその理由の一つではあるが，それまでの過程で日本人学生側の理解しよう，理解できるよう話そうという態度や努力があったからこそお互いに分かり合えるようになったのではないかと思われる。学期を通して参加してくれた日本人学生にとっては，留学生との交流を通して参加には英語を流暢に話す必要があるのではないかという思い込みがなくなり，初級日本語話者に理解可能な日本語使用について考える場となったのではないかと思われる。

今後の課題としては，日本人学生をいかに活動に引き留めるかということと，満足度の高い，より効果のある活動を立案することである。これには，留学生も日本人学生もお互いに得るものがある活動を企画・実施することが大事である。そのためには，同じクラスを担当する教師やこの活動を実施している教師との意見交換をより密に行い，さらに，留学生と日本人学生にもブリーフィングを行うことで解決策を見いだせるのではないかと考えている。

２．日本語Ａ２クラス

両学期とも，概ね，活動の成果は良好であった。少人数クラス（留学生３～４人，日本人学生３～４人）だったため，ほとんどの活動でペア活動ができ，発話の機会を多くとることができた。留学生は，専門の研究や発表などで多忙のため欠席することが多く，継続的な参加は難しかったが，日本人学生との関係はしっかりと築けていた。日本人学生はほぼ毎回同じメンバーが参加し，個々の留学生の特徴（発音や苦手な個所など）を把握してくれ，日本語指導にもしっかりと取り組んでくれた。ただし，留学生は自分の言いたいことはある程度相手に伝わるものの，日本人学生の発話意図がくみ取れない場面も見られ，聞く技能の向上に課題が残った。

活動内容として好評だったテーマは，「家族・友達について」「トピックについて話す」「ミニ外国語レッスン」「日本の歌」だった。いずれも，留学生，日本人学生双方

の個人的な内容が出やすいテーマで，お互いにより興味が持て，積極的に参加できたのではないかと考えられる。ペア活動では，お互いの興味がうまく合う（アニメ好き等）トピックについては盛り上がっていた。また，2014年春学期には，教室空間を離れた活動を2回実施した。天気が良い日には，図書館前のベンチで，青空教室風に話す活動を設けた。開放感あふれる空間で，お互いに自然に会話が弾んでいた。昼食時間が近い時間割だったため，学生食堂で食べながら話す活動も設けた。食文化の違いや宗教上の問題等を実際に体験することで，お互いにより深い内容について話すことができた。教室から一歩出ただけで，リラックスでき，留学生と日本人学生，教師の距離がぐっと縮まった印象を受けた。それはその後の教室活動へも少なからず影響があったと思われる。

留学生の学期始めのcan-doシートによると，日本人と話せた達成感はありつつも，自分が言いたいことが言えなかったという挫折感も感じていたようだった。来日間もない学生の中には，学期前半は，簡単な単語も出てこなかったり，基本文型が崩れてしまったりと，話すという活動自体に不慣れな姿が見られ，英語での補足や，教師の助けを必要とした。しかしながら，回を重ねるうちに，そうした傾向は徐々に薄れていく印象を受けた。

話す活動は，皆毎回とても楽しみにしていて，積極的に活動に参加した。学期始めはかなり緊張している様子だったが，学期中盤からはお互いの信頼関係もでき，冗談を言い合うなど，終始和やかな雰囲気で活動が進められた。また，回を重ねるうちに，それぞれのペアが，うまく内容をつなげて，1つのトピックで長く深く話せるようになっていった。学期終了時のインタビューでは，「この活動のおかげで自分の日本語が伸びた」「日本人の新しい友達ができた」というコメントが得られた。日本語初級の学生にとって，特に来日間もない学生にとっては，日本留学後に初めて日本人と話す機会が日本語の授業であることは珍しくない。そういった面では，教師や仲間の助けが借りられる教室の中で，日本語を話してみるという経験は，ある程度効果があると思われる。

日本人学生も皆積極的に参加した。回を重ねるごとに，スピーチレベルを変えて話したり，言い換えをしたり，筆談等で工夫しながら参加した。ただ，学期始めから終わりまで固定のメンバーが参加してくれた2014年春学期は活動がしやすかったが，2013年秋学期は，悪天候もあってか学期後半は欠席者が多くなり，予定していた活動もできないことがあった。日本人学生の授業後のコメントシートやインタビューからは，「ゆっくり大きな声で話したほうが伝わりやすい」「自分の口癖で困らせてしまった」「学期初めはノーマルの日本語を使ってしまい，会話にならず戸惑ったが，短文に

したり，言いかえをしたり工夫をすると伝わるようになって，よかった」といった自分の言語使用に関するものや，「留学生の国の言葉や宗教などについて知れてよかった」「日本語を教えるのは難しいと感じたが，留学生の懸命に勉強する姿勢をみて感心した」など，留学生の国や文化，学習への姿勢などについて気付いたことのコメントが得られた。

今後の課題としては，次のことが挙げられる。実際の活動では，少人数クラスで恵まれた環境だったため，留学生が日本人と話す機会を多く与えることができた。しかし，自由度が高い活動であるがゆえに，体系立てた言語的知識の導入や練習はあまりできなかった。これらの知識や運用力の向上は，本人の意識や努力に頼るところが大きい。教師の介入をどのように行い，どの程度までするかを考える必要がある。また，日本人学生の存在を効果的に活用する工夫も必要かもしれない。目の前の同世代の日本人学生が発信する内容を生で知りたい，理解したいという留学生の強い関心が，留学生自身の学習意欲を高め，より積極的に活動に参加することができると考えられる。しかし，その場合は，学期始めから終わりまで参加してくれる日本人学生をいかに確保できるかが課題となる。日本人学生はあくまでボランティアであるため，学期始めはやる気があり参加人数も多いが，徐々に減っていき，無断欠席も多く，予定していた活動ができないことも予想される。今後は，日本人学生の継続的な参加方法について再検討する必要がある。

3．日本語Bクラス

まず，初級クラス共通の目的である，日本語の運用力を高め，日本語学習のモチベーションを高めるという活動の目的は達成していたと思われる。留学生に対し学期末に実施したアンケートでは，「この活動が日本語の上達を助けた」という項目で14名中13名が「そう思う／強くそう思う」と回答していた。日本人からも，短期間での上達に驚くコメントがあった。学生たちはこの活動を非常に楽しんでいる様子で，毎回盛り上がり，時間が過ぎても教室に残って話を続けている姿がよく見られた。時間が短い，もっと話したいという声は留学生・日本人学生双方から聞かれた。活動を楽しみにする気持ちが学習者たちの日本語学習のモチベーションを高めていることは間違いないだろう。Bクラスでは「can-do diary」というシートに，教室内外における「日本語で初めてできたこと」「日本語でできなくて残念だったこと」を1，2週に一度の頻度で自由に書かせているが，できなくて残念だったこととして活動時「言葉が分からなかった」「文法をよく間違える」「自由に話すことができない」「速く話すと分からない」などの記述があった。日本人との自然なやりとりの中で語彙力や表現力，聴解力の不足

といった自分の弱点を自覚することは，さらなる上達への一歩であるといえよう。また，can-do diary には，特に学期の初めごろは「日本人と〇〇について話すことができた」と活動で話した内容に関する記述が多く見られた。これは，学期の最初はまだ日本人と話す機会が少ないためと考えられ，話す活動が日本語使用の貴重な場を提供しているということができるだろう。

次に，「日常的に出会う場面で自分なりに文を作り出し，依頼や許可求めなどのタスクを達成できるようになる」「臆さず発話できるようになる」というBクラスとしての目的も，概ね達成できた。RPは定期試験でも行っており，学生たちは自分で会話を始め，終わること，また場面・状況に応じた表現を選択し，自分で文を作り出すことがほぼできるようになっていた。もちろん語彙・文法等正確でないこともあるがタスク達成を妨げるほどのものはなく，むしろ間違っていようとも何とかタスクを達成しようという姿勢が試験においても見られた。日本人学生からのコメントにも「こまごました間違いはあるがちゃんと伝わる」「一生懸命話してくれた」とあった。

また，「おしゃべりに慣れる」という目的は，さまざまなトピックで話す経験を積み重ねたことで達成できたと思われる。ただし、トピックには学生にとって話しやすいものとそうでないものがあり，日本人学生からのコメントにも「話せるトピックと話せないトピックがあるようだ。いろいろ話せるようになるといい」とあった。留学生に個々のトピックについて評価を求めた際にも，「私の国のニュース」など社会的なものや抽象度の高いいくつかのトピックについては「つまらなかった・役に立たなかった」とする者が数名ながらおり、これらは全員が興味を持てるトピックではなかったようだ。

今後の課題としては，ボランティア参加のため人数が一定しない日本人学生に，いかに学期を通して継続的に参加してもらうかということが大きい。2限にするなど参加しやすい時間設定などのほか，日本人学生にとってより魅力的な活動となるよう，さらに内容とやり方を工夫していくことが必要である。その他の課題としては，活動で扱うトピックをさらに吟味することが挙げられる。留学生の力を伸ばすためには，あまり話したことのないトピックにも挑戦することが必要であると考えるが，そのトピックが本当にこのクラスで適当かどうかということは検討しなければならない。たとえば，より日常的なものであまり話せないトピックがあるなら，社会的・抽象的なものよりそちらを優先したほうがいいかもしれない。また，そもそも社会的・抽象的なトピック自体，日本語は日常会話で十分という学生が多いBクラスでは必要でない可能性もあり，毎学期内容を検討していくことが求められる。

4．日本人学生への効果

この活動は，当初，留学生の日本語の運用力を高めること，日本人学生との接触場面を作ることで，留学生の日本語学習の動機を高めることをねらいとして始めたが，数学期間継続してみて，日本人学生にとっても意義のある活動となっていることが見えてきた。

まず一つは，留学生との交流のきっかけとしての役割である。毎学期，学期開始時にこの活動についての説明会を実施しているが，多くの日本人学生が参加してくれる。中でもこの活動に参加を希望する日本人学生には1年生が多い。日本人学生からは，留学生（外国人）と交流してみたいが，何をどこからどう始めたらよいかわからない，といった声を聞く。この活動は，彼らのように，留学生との交流の機会自体をあまり持たない学生たちにとって，留学生との交流の機会を得る最初の入り口として機能しているといえる。また，日本人学生からの発言や質問からは，留学生と話すには英語ができないとだめだという思い込みからなかなか留学生に話しかけられない，といった様子も窺える。そこで，彼らにはこの活動を通して，留学生とは必ずしも英語ではなく日本語でも気軽にコミュニケーションができることを説明会でも伝え，経験を通して理解してもらうことにしている。実際に参加した学生からは，「思っていたよりも日本語が通じていて楽しかった」（A 2クラス）といったコメントもあり，この活動が，交流への敷居の高さを取り除き，留学生との心的距離をぐっと縮めるきっかけにもなっていると言える。さらに，この活動への参加を申し込んだ日本人学生には，本学の留学生のチューター制度[注6]についても紹介しているが，毎学期，半数以上の日本人学生がチューターを「ぜひやりたい」「興味がある」と答え，話す活動に参加した次の学期に実際にチューターとして活動している学生も多い。このように，この活動は日本人学生にとって，留学生との交流の足がかりとなっている。

次に，日本人学生の外国や異文化に対する興味・関心の喚起である。活動に参加した日本人学生からの，「相手の国のことに興味がわいた」（B クラス）「中国と日本の文化はやはり似たことも多かったが，少しずつ違っていて，初めて知ることもあり，おもしろかった」（A 2クラス）といったコメントに見られるように，他国について興味を持ち，理解を深めていっていることがわかる。この活動に参加する学生の中には，もともと外国や異文化に興味関心を持っており，中には在学期間中に留学を考えている学生も少なくないが，そうした学生たちにとっては，実際に留学生と交流することで，さらに海外への興味・関心を高めることにつながっているようである。

もう一つは，日本人学生のコミュニケーション力育成の場としての役割である。クラスの活動に参加した日本人学生の授業での観察からは，母語である日本語にもかか

わらず，意思疎通をすることの難しさに戸惑いつつも，相手に伝えるために言い換えなどをはじめさまざまな工夫をしてコミュニケーションをとろうとしている様子が窺える。毎回の授業後に書いてもらった各クラスのコメントにも，「わかりやすく伝えることができなかった」（B クラス）「一方的に話しすぎてしまった。でも質問を理解して答えてくれてうれしかった」（B クラス）「相手の言いたいことがわからなくて戸惑うこともあったが，言い換えなどで理解できることが多かった」（A 2 クラス）といったコメントが見られた。また，言葉の用法や使い方などを留学生に質問されたり説明したりすることで，「外国語としての日本語」に対する気づきも少なからずあるようである。これらの気づきは，日本人学生自身が外国語を学ぶ際にも役立つと思われる。さらに，コミュニケーションをいかにして成立させるか，そして伝わる喜びを，身をもって知る貴重な機会ともなっている。ともすれば「コミュニケーション力＝外国語能力（＝英語力）」という誤解が少なくないが，彼ら日本人学生が将来社会で求められているコミュニケーション力は，必ずしも外国語能力だけではなく，「相手にいかにして伝えるか，自分の伝えたいことをわかってもらえるか」である。この活動は，日本人学生にとって，どのように相手とのコミュニケーションを成立させ，互いを理解していくかを学ぶ場にもなっているといえる。

本学は現在，一層のグローバル化に向けてさまざまな改革を行っており，数年前に比べて，留学生と日本人学生が共に学ぶジョイントクラスの開講や，留学生と日本人学生が混在する学生宿舎の建設など，留学生と日本人学生が物理的に接触する機会は増えている。しかしながら，こうした「入れ物」を整えさえすればコミュニケーションが促進されるかというと決してそうではない。日本語クラスでの話す活動は，留学生と日本人学生の学び合い，そして真の相互理解を進めていくためにはどのような手法や支援が必要かといった「中身」を考えていく上で，教育現場に多くの示唆を与えることができるだろう。

V. まとめと今後の課題

以上，日本語初級クラスの話す活動についての実践について述べてきた。本活動の意義は以下のようにまとめられる。

(1) 生きたインタラクションからの学び

留学生は教師のコントロールされた発話以外にさらされることで，現実のコミュニケーションで遭遇する場面を経験する。それにより，自分の日本語の問題点を自覚し，それが次の自分の学習目標になる。また，限られた言語表現を使ってコミュニケーショ

ンをしようとする際のストラテジーを，日本人との現実のやり取りを通して，時に教師の支援も得ながら身につけることができる。

(2)　教室内での活動を越えた学習の幅の広がり

学んだ表現を実際の日本人を相手に使う練習をすることで，より現実に近いコミュニケーション活動を教室場面に取り入れることができる。また，学習者にとって「日本語を使う」意味のある多様な活動や，時に教室外で活動を行うことで，教室場面での言語学習に広がりを与えることができる。

(3)　日本人学生にとっての異文化コミュニケーションの場

参加する日本人学生にとっては，留学生との交流のきっかけを得られるだけではなく，留学生と「日本語で」交流することにより，コミュニケーションを成立させるためのスキルを身に付けるとともに，相手の国や社会，文化への理解を深める場となっている。

このように，日本語クラスにおける話す活動は，日本語学習者である留学生と授業に協力してくれる日本人学生の両方にとって意義が認められた。しかしながら，いくつかの課題も明らかになった。

(1)　日本人学生の継続的な参加のための工夫

全ての初級クラスに共通する現象として，最初は参加希望者が多いが，回が進むにつれて参加者が減っていくことが問題となっていることがわかった。特に毎週継続して行う初級クラスにとっては，活動の成立に関わるので，日本人学生の継続的な参加を促す仕組みや工夫は必要である。例えば，活動の趣旨や位置づけ，教師側が期待することを明確に日本人学生に伝えておくなどの配慮も必要であろう。

(2)　授業で取り入れる活動内容の検討

各クラスの学習目標に沿って，担当教師がさまざまな活動を意欲的に取り入れた結果，留学生にとって満足度の高い学習活動が実現できているが，特に日本語の基礎的な部分を身に付ける段階である初級クラスにおいては，他の学習活動とどのように関連付けて効果的な授業を作り出していくか，また，扱う活動や話のトピックについて，それぞれのクラスの学習到達目標や中級以降のクラスとの活動内容とも照らして，さらなる検討が必要と思われる。

以上のことをふまえ，今後の活動をより効果的なものにするために，いっそうの改善と工夫を図っていくつもりである。

【付記】

本論文の，Ａ１クラスの記述は川上が，Ａ２クラスは岡本が，Ｂクラスは鶴町が，その他については深川が執筆を担当した。

【謝辞】

この報告をまとめるにあたり，授業での学習活動に取り組んだ学習者（留学生）の皆さま，授業に協力してくださった日本人学生の皆さま，そして2013年秋学期，2014年春学期に共に教育に携わった，本プログラム日本語Ａ１クラス，日本語Ａ２クラス，日本語Ｂクラスの先生方に感謝申し上げます。

【注】

1　金沢大学国際機構留学生センター

2　2014年10月30日時点での集計による。

3　春学期は前期（４月～９月），秋学期は後期（10月～３月）を指す。

4　Ａ２クラスは，プログラム改編により，2014年春学期は週３コマ（総学習時間数75時間）となった。

5　Ｂクラスでは2013年秋学期以前から学生からの声を元に活動の内容を毎学期少しずつ改善してきており，ここ数学期はほぼこの内容になっている。

6　留学生の学習・研究効果の向上を図ることを目的に，指導教員の指導のもとに，大学が選定したチューターにより，教育・研究について個別の課外補助やサポートを行う制度である（金沢大学国際機構『チューターのためのマニュアル・平成26年度秋改訂』）。

【参考文献】

1．スリーエーネットワーク 編著（2013）『みんなの日本語初級Ⅰ本冊第２版』スリーエーネットワーク

2．スリーエーネットワーク 編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ　本冊』スリーエーネットワーク

Positive Influences of the Speaking Activity with Japanese Students Offered to the Beginners' Level of the Japanese Language Course

Miho Fukagawa, Yoshiko Tsurumachi, Yuka Kawakami and Sayako Okamoto

Abstract

This paper reports on the speaking activities with Japanese students which are offered to the learners in the beginners' level of the Japanese Language Course. First, the Japanese language program of Kanazawa University is described then the outline and objectives of the activity are listed. These are followed by an explanation of the practical procedures for the activities in each class. Finally, the results of the activities are given. To determine this outcome, observation by Japanese language instructors, comments from the Japanese students and results from a questionnaire given to the Japanese language students were analyzed. The outcome revealed that the activities were valuable for improving the Japanese language skills of Japanese language learners. The results also found that the activities were instrumental in improving the communication skills of the Japanese students and cultivating their interest in intercultural exchange.

【Keywords】 Speaking Ability, Communication Skill, Japanese students, Cross-cultural Understandings